

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第27巻第2号 (2019年7月21日)

25回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239

2016年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240

2017～8年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

27巻第2号 目次

はじめに

テーマ:商品とお金の弁証法的精神分析

6月29日勉強会報告

政治運動と社会運動とを横断する新しい大きな物語を紡ぎだそう

寄稿論文最後の一節 革命後の政治解明のための課題の提起

ガタリの機械論

7月6日ガタリ研究会での報告

商品という社会的象形文字を読む(6月29日修正版)

はじめに

この間、69年～70年の武装闘争と内ゲバの総括論集の原稿に集中力をとられていました。7月13日が締め切りで、二つの原稿を入稿しました。この論集についてはチラシ第二弾が印刷されましたが、添付の裏面の赤線にあるように、修正が必要であり、現在刷り直し中ですが、間に合わないのので、既存のチラシを赤線付きで添付しておきます。

原稿は「建軍の時代」と「政治運動と社会運動とを横断する新しい大きな物語を紡ぎだそう」です。前者は1960年安保闘争に始まり、70年武装闘争と7年間の未決拘禁を経て出獄し、社会運動に転身するまでの事柄を書きました。一応皆さんの原稿を拝見する立場（発起人）でしたので、送られてきたものを読んでみると未来がないと感じました。もともと70年闘争以降の活動についても書いてもらうことにしていたのですが、あまりありません。それで危機意識を持ち、独立の論文として後者を書きました。文体も変えています。

いつもなら寄稿論文も事前に公開するのですが、今回は自費出版だとはいえ、講談社から出しますので、事前公開は控えます。とはいえ、後者の論文の最後の部分は、関連するので掲載します。なお本は11月30日に公刊予定です。

あと、今年から、商品とお金の弁証法的精神分析という課題を掲げて、『アンチ・オイディプス』の検討をはじめ、ついにはガタリの単著を検討せざるを得なくなり、精神分析という慣れないジャンルで苦勞しました。もともとフロイトなどは全然評価していないのに、それについて論じられている文献を読まねばならない、というのは苦痛以外の何ものでもありません。おかげで久しぶりに歯痛に悩まされています。

さて、商品とお金の弁証法的精神分析について、これまで3回話す場を持つことができました。ひとつは5月19日東京での文明フォーラムであり、次に6月15日のジャンル難民学会、そして最後は6月29日の勉強会でした。レジュメは使いまわしていますので、6月29日のものを公開しておきます。

3回の報告で、一応中身の確定ができました。報告のスタイルとしては、まず問題意識を述べ、次にマルクスから実例を示し、そして精神分析と弁証法について説明し、最後に商品という社会的象形文字を読む、というかたちです。大学の講義のように、これを初講にし、あと続講を続けていくという風に考えています。その続講のひとつが、龍谷大学のガタリ研究会のガタリの機械概念についての報告であり、そしてさらに7月のルネサンス研究所の定例研究会では、ガタリの統合的世界資本について話すことにしています。

だんだんわかってきたことですが、精神分析の業界では、ラカン派の影響が非常に強いです。ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』（河出書房新社、2000年）では、冒頭論文の小見出しは「マルクスとフロイト」であり、そこでジジェクは、マルクスによる商品の分析とフロイトによる夢の分析とが、形態分析という意味で同一だとみなしています。また、中野昌宏『貨幣と精神分析』（ナカニシヤ出版、2006年）もラカン派の立場です。後者は以前に一度読みましたが理解不能でした。しかし、現在ではそうも言っておられません。

フロイトにも自我や超自我といった図式がありますが、ラカンにも同じような図式があるのでしょうか。それがわかっている人にはわかるが、そうではない人にはまるで分らない、というこの業界に参入する以上は、『アンチ・オイディプス』以上の仕掛けが必要でしょう。どのような仕掛けを作るかを楽しみにこの苦行に耐えることにしましょう。ポイントは商品や貨幣や資本による人格に対する意志支配だということだけは明らかですが。

ということで、まず定番化された、商品とお金の弁証法的精神分析について、6月29日の報告レジュメを掲載します。この時に、無意識という言葉は、精神医学界では、テクニカルタームであり、マルクスの言う無意識は日常用語だから、その区別をはっきりさせるべきだという意見をいただきました。次は、総括論集に掲載する「政治運動と社会運動とを横断する新しい大きな物語を紡ぎだそう」の終りの問題提起の部分です。6月29日の報告の最後の部分の補足です。最後は7月6日の龍谷大学で行われたガタリ研究会での報告

です。

テーマ:商品とお金の弁証法的精神分析

6月29日勉強会レジュメ

1. はじめに

マルクス『資本論』冒頭部分で展開された価値形態論は難解で有名です。報告者は、この理解に関して『資本論』第2版（現行版）ではなく、1868年に出版された『資本論』初版本の価値形態論にこだわって研究を続けてきました。

報告者は、現行版で貨幣形態として展開した第IV形態が、初版では貨幣が生成されない形で展開され、貨幣形態としては展開されていない点に着目しています。すなわち、初版で商品所有者が登場しない価値形態を分析したマルクスは、価値形態論では貨幣は生成しないという主張を込めたのです。

価値形態論に続いて交換過程論でマルクスは商品所有者を登場させて貨幣の生成を論述しますが、その際に商品所有者たちが自分の商品に自己の意志を宿し、それを金となら交換してもいいとする無意識のうちでの本能的共同行為がなされる、と主張しているのです。こうしたマルクスの主張は、現行版からは読み取れなくなっています。

従来 of 研究者たちが、初版価値形態論を未熟なものと考え、この貨幣生成論を無視してきた現実に対して、今年から報告者は、マルクスが無意識を問題にして商品とお金の精神分析をしたという観点から研究を始めており、今回はその進展についての報告です。

2. 『資本論』初版でマルクスが無意識を問題にしている箇所

資料:マルクスによる商品とお金の弁証法的精神分析の事例

無意識的、本能的作用

「彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に価値として関係させるからである。人的な関係が事物的な形態によって隠されているのである。したがって、この価値の額には、それがなんであるか、は書かれていないのである。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されているのである。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは、物質的なものを抽象物たる価値に還元することによって、それを行うのである。**これこそは彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた無意識的、本能的な作用なのであって**、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産が彼らをそのなかに置くところの諸関係とから必然的に出てくるのである。」(『資本論』初版、①商品、原典 38 頁)

(注) 現行版の記述「彼らは、彼らの相異なる種類の諸生産物を交換において価値として相互に等置することによって、彼らの相異なる諸労働を人間的労働として相互に等置する。**彼らはそれを意識してしてはいないが**、そうするのである。だから、価値なるものの額には、それが何であるかということは書かれていない。価値は、むしろ、どの労働生産物をも一つの社会的象形文字に転化する。のちにいたって人々は、この象形文字の意味をとこうとし、彼らじしんの社会的産物——けだし、価値としての使用対象の規定は、言語と同じように彼らの社会的産物である——の秘密をさぐろうとする。」(長谷部訳、河出書房新社版、68 頁、第 4 節 商品の物神的性格とその秘密、原典、78～9 頁)

このように「無意識」と「本能」が消されている。

「われわれの商品所持者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考え込む。はじめに業ありき。だから、**彼らは、考えるよりまえに、すでに行っていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所持者たちの自然本能において自分を実証しているのである。**彼らが自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた諸商品として関係させることができるのは、ただ、彼らが自分たちの商品を、一般的な等価物としてのなんらかの別の商品に対立的に関係させる、ということによってのみである。このことは、商品の分析によって明らかにされた。しかし、ただ社会的な行為だけが、ある特定の商品を一般的な等価物にすることができるのである。それだから、すべての他の商品の社会的な行為が、ある特定の商品を除外して、この商品においてすべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表すのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的な等価物であるということは、社会的な過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能となる。こうして、この商品は——貨幣になるのである。『彼らは心をつにししている。そして、自分たちの力と権力を獣に与える。この刻印のない者は、みな、ものを買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、またはその名の数字のことである。』(ヨハネ黙示録)」(『資本論』初版、②交換過程、原典、47～8頁)

*『資本論』初版より、訳文は、国民文庫版、岡崎次郎訳ですが、物(Sache)を事物に代えています。

(注) 第2章 交換過程

この章でマルクスは初版の記述をほとんど変えていない。だから、貨幣の生成が、価値形態論と交換過程論で二重に解かれていることになり、有名な久留間・宇野論争があった。この論争は本来初版に即して議論すべきで、そうすれば価値形態論では貨幣の生成は解けず、貨幣生成は、商品所有者が登場する交換過程論でしか解明できないという、マルクスの初版での意図がつかみ取れたはずだった。

3. 私たちがめざす精神分析とは

ドゥルーズ、ガタリ『アンチ・オイディプス』の分裂分析の継承

この書は、フランソワ・ドス『ドゥルーズ、ガタリ 交差的評伝』(河出書房新社、2009年、以下『評伝』と略記)によれば、精神分析の批判を試みたもので、出版当時の書評は精神分析家からの異論がほとんどだったそうだ。『評伝』を読んでわかったことは、精神分析の批判の上に二人は「分裂分析」という別の方法を確立したのであって、この二つの方法は、分析対象を全く異にし、したがって、叙述の方法も異なるものとして、用いられていた。

端的に言って、精神分析が、無意識を個人の頭のなかに探索したのに対して、ドゥルーズ、ガタリは、個々人の頭の外にある資本主義という機械が無意識の製造元としてとらえられ、資本主義そのものが分裂症的で、その資本主義を対象に無意識を解明する自らの方法を「分裂分析」と規定して、「精神分析」と区別したのだった。

わたしたちはこの「分裂分析」の方法を継承する。ただし、二人は資本主義については分析しているが、商品とお金については不十分な分析しかしていない。だから、二人の分析を継承しつつ、新たに展開することが必要である。

4. 弁証法とは

反照の弁証法

弁証法というと、エンゲルスの次の規定が常識である。

エンゲルスがまとめた三つの法則があげられる。

「量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則。」(『自然の弁証法』1、国民文庫版、65頁)

ここには反照の論理も形態規定の論理もなく、従って関係の論理がない。しかし、関係の論理こそ、いまだに哲学者たちがつかみあぐねている当のものであり、ここにこそ弁証法の核心がある。これを反照の弁証法と名づけよう。

マルクスは初本文価値形態論を念頭に置いて、理解が困難で、弁証法が鋭くなっていると述べた。それはエンゲルスの三つの法則以外の反照の弁証法の展開を予想させる。私が1995年2月に公表した「反証の弁証法」を以下に引用しておく。

関係という、思考によっては捉えどころのない存在の様式

「諸関係というものは、総じて、それらが、たがいに関係しあっている諸主体から区別されて、確定されなければならないとされるばあいには、ただ思考されることができるだけだからだ。」(『資本論草稿集』4巻116頁)

マルクスは『経済学批判要綱』として戦後出版された研究ノートで、A、B二つの商品の交換関係を考察し、この関係で等しいものは、AでもBでもない第三者であり、この第三者はある一つの関係を表現しているから頭の中の表象として存在している、と述べたあと、このように、関係それ自体は思考されることができるだけだ、と述べた。これはおそらく、関係として表現されるものが、抽象的なものであり、人間の感性では捉えられない超感覚的なものであるからなのだろう。

関係をたがいに関係しあっている諸主体をも含めて理解しようとするれば、それは一つの形態として存在している。従って、二つの商品が関係している、という経済的な関係の内容は、この経済的な形態を分析するところから導き出されねばならない。形態はおのずから内容を決めている。その経済的な形態のうち形態規定を発見すればよい。ところがそうしようとするれば、諸主体は関係の項となり、両極となってしまふ。ここではヘーゲルが磁力について述べている両極性の論理が働く。

「両極は、一本の實在的な線の感性的に現存する両端である。しかしこれらの極は、極としては、感性的な、力学的な實在性を持たず、観念的な實在性を持つ。これらの極は分離することが全く不可能である。」(ヘーゲル『エンチクロペディー』河出書房新社、253頁)

先にマルクスが、関係を両極から区別し、それ自体を確定しようとするれば、それは単に思考されるだけのものにしかならない、と述べていた。そこで、関係する諸主体をも含め、関係を一つの形態として想定し、形態規定を発見しようとするれば、今度はヘーゲルが、両極は感性的な實在性を持たない、と言う。

外的素材はなくとも論理を展開していく観念論とは違い、感覚的に確かめうる外的素材を分析しようとする唯物論にとっての困難が現れる。二つの商品の経済的關係について、関係そのものを分析しようとするれば抽象的となり、ついで両極を分析しようとするればそこには観念的な實在性しかない、というのである。

反照の論理

では関係を把握するにはどうすればよいのか。関係の論理学はありうるのか。関係の論理学は反照(リフレクション、反省、反射とも訳される)の論理学であり、マルクスが明らかにした形態規定はヘーゲルの反照論を完成させたものであって、これこそが弁証法の核心をなしている。このことを明らかにしよう。

ヘーゲルは相互に独立したもの同士の関係における反照の論理を次のように展開している。

「両者がそれぞれ自分は他者ではないという形で向自的にあるのだから、両者はそれぞれ他者の中で照り返しており、他者があるかぎりにおいてのみあるのである。したがって本質の区別は対立措定であり、これによれば、区別されたもの(両者)は決して他者一般を持つのではなくて、自分の他者を自分に対して持つのである。両者はそれぞれ自分の独自の規定を他者への自分の関係の中にのみ持つ、そしてそれが他者へと反照させられてい

るときじつはただ自己へと反照しているにすぎない。そして、その他者もまたこれと同じことをしているのである。このように、両者はそれぞれ、他者固有の他者なのである。」(『エンチクロペディー』131頁)

ヘーゲルの論理学の本質論では反照の論理が駆使されて、本質が何であるかを展開していく。反照の論理は本質の展開過程で様々であるが、論理としてとりだすならば、ここに示したものとなる。

ヘーゲルにとっては、論理学で対象となっているものは思考である。従ってそれは直接的には外的対象にとっての論理ではない。とはいえヘーゲル論理学の特徴は、それが思考を対象としつつも、その概念を客観化するものと捉えているところにあった。従って、伝統的な論理学とちがひ、対象の論理をもそのうちに組み込んでいた。だから、対象に則して反照の論理を展開しようとするとき、ヘーゲルの論理には弱点が現れる。それは形態の規定をどう捉えるか、ということである。

ヘーゲルにとって本質的なものは関係であると捉えられてはいても、それは思考と思考との関係であった。従ってその反照にもとづき、現象が生成され、一つの形式が出現したとしても、それは本質の形態でしかありえなかった。ところが思考とは異なり、外的素材が関係を結ぶと形態が二重化してしまう。外的素材は新たな形態によって形態規定され、本来の自然的質の他に新たな質を持ってしまう。ヘーゲルに欠けているものはこの形態規定の論理である。

形態規定の論理

商品A、例えばリンネルは使用価値である。これと商品B、例えば上着が関係させられ、1 エレのリンネル=1 着の上着、という経済的關係が成立しているとしよう。

リンネルは使用価値としては上着と異なっている。リンネルとも上着とも異なる第三者がこの関係を取りもっているのだが、それはただ思考されることができるだけである。マルクスは社会の中で成立している抽象的人間労働がこの第三者であることを発見し、それを価値の実体と規定したが、それ自体は思考産物でしかなかった。

ところが、リンネルと上着を両極とする価値関係を考えると、両極が反照しあうことによって、先の思考産物が実在的なものに転化される。このときヘーゲルは両極が観念的な実在物になることを心配していた。マルクスが発見した形態規定の論理は、ヘーゲルの心配を杞憂とした。

「リンネル価値の上着での表現は、上着そのものに一つの新しい形態を刻印する。・・・上着はいまやまったくそのありのままの姿で、上着というその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、一つの交換の可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態を持つ。」(『マルクス経済学レキシコン』11巻、27頁)

二つの商品がとりもつ関係を表している形態が、それぞれに新しい質を与えることが形態規定の特徴である。両極にそれぞれ新しい質が与えられる、ということは、従来の質が観念的な実在物に転化されることを意味している。この点でヘーゲルの心配は当たっていた。しかし、両極が新しい質の形態として形態規定されていることを知れば、両極は二重物になった、ということであり、感性的な実在物が、超感性的な質を形態規定によって新たに獲得した、ということなのである。

反照の論理が形態規定の論理と結び付けられることによって始めて、外的素材同士の関係が解明しうる。双方を結びつけた例が、マルクスの商品論なのである。

「われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間的労働力の支出として商品価値で評価される限りでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働を前の形態で考察するときには、あとの形態では考察しないし、あとの形態で考察するときには前の形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのづからたがいに分かれるのであり、したがってまたたやすく見分けられ

うるのである。商品の商品に対する関係の中にだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは一つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用的労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと一つの二重物、すなわち使用価値及び価値、有用的労働の生産物及び抽象的な労働凝固体である。それ故商品は、自分が商品なのだということを表すためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいて始めて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用姿態、その自然形態である。ところで、一商品、例えばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだが、それは、なにか他の自然形態を、他の一商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。」(同、31～2頁)

商品の価値関係にあっては、等価商品の使用価値が形態規定を受けて、別の質である抽象的人間労働の現象形態となること、このマルクスの発見を理解できている人々が何人いるだろうか。

鏡の比喩

マルクスは二商品の価値形態に形態規定の論理を発見し、主としてヘーゲルによって展開された未完の反照の論理を仕上げた。等価形態にある商品が、その自然的形態のまま、その反対物たる抽象的人間労働という社会的・一般的なもの現象形態になる、というこの論理を解明したところでマルクスは興味のある注をつけている。

「見ようによっては人間も商品と同じである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間の中に自分を映してみるのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって、始めて人間としての自分自身に連関するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体は、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態として意義をもつのである。」(『資本論初版』、国民文庫、49頁)

ヘーゲルにこのことがわかっておれば、『精神現象学』の展開もずいぶん変わったものとなったであろう。もっともマルクスがここで用いている鏡の比喩についてはスミスが『道徳感情論』ですでに使っていた。

「もし、人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種とのなんの交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、彼は、彼自身の顔の美醜について、考えることができないであろう。これらすべては、彼が容易に見ることができず、彼が自然に注視することがなく、それらにたいして彼が目を向けることができるようにする鏡を与えられていない、諸対象なのである。彼を社会のなかにつれてこよう。そうすれば彼は、ただちに、彼が前に欠如していた鏡を与えられる。それは、彼がともに生活する人々の、顔つきとふるまいの中におかれるのであって、その顔つきとふるまいは常に、彼らがいづ彼の諸感情の中に入り込むか、いつ彼の諸感情を否認するかを、表示するのである。そして、ここにおいてはじめて、彼自身の諸情念の適宜性と不適宜性、彼自身の精神の美醜を、眺めるのである。」(筑摩書房版、181～2頁)

スミスもマルクスも同じことを述べているが、スミスは文字通り鏡の比喩としてしか展開できていないのに、マルクスの場合、ガラスの鏡とは異なる人鏡の論理を解明している。

そうだから、この論理は、ヘーゲルの『精神現象学』の承認の論理をのりこえるものとなったのである。

弁証法の核心

弁証法とは何か、と言うと、エンゲルスがまとめた三つの法則があげられる。

「量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則。」(『自然の弁証法』1、国民文庫版、65頁)

ここには反照の論理も形態規定の論理もなく、従って関係の論理がない。しかし、関係の論理こそ、いまだに哲学者たちがつかみあぐねている当のものであり、ここにこそ弁証法の核心がある。

自然物が関係の項となることによって社会関係に入るとき、形態規定によって自然物が二重の質をもつ。問題は形態規定によって与えられる新たな質が何であるかを発見することであり、その抽象的なものがその関係の両極の反照によって抽象されていることをつきとめることにある。

そうだとすれば、両極の反照による抽象化、つまりは総合による抽象が弁証法の核心だ、ということにならないだろうか。このように捉えることによって、思考と存在とをつなぐかけ橋として弁証法を位置づけることが可能となるのである。

5. 社会的象形文字一覧とその解説

社会的象形文字の意味

諸商品の関係を、社会(市場)というキャンパスに描かれた象形文字と捉える、つまり商品自体が関係しているさまを象形文字として読む。

添付した当日配布の資料:「商品という社会的象形文字を読む」について(末尾に追加)

ここで、簡単な価値形態は、X量の商品A=Y量の商品B、というように、等式で表示されている。数学では等式は数の同等性の表現であるが、価値形態ではそうではない。そこで表示されているものは、価値という質の同等性で、商品Aが商品Bに値するという意味である。だから、AはBに自分を等置している(AがBを同等化している論理式)のではなくて、自分にBを等置している(お互いに主体として反照しあっている関係)のだ。

この理解が価値形態理解の全てである。

簡単な価値形態がヤマ

等号(=)の意味

- ①数式
- ②論理式
- ③天秤秤
- ④商品語

現行版は価値等式における両極の同一性を前提に解説している:学校教師風の説明。初版は、価値の同一性を分析によって証明している。これが根本的相違で初版の難解さはここにある。

その他、派生的な事柄

価値形態の秘密と謎 訳語問題で、ルカーチの『歴史と階級意識』にある物化を物象化と平井俊彦が訳したため、この区別がつかなくなっている。秘密の方は事物化(物象化)に関連し、等価形態にある商品の使用価値がそのまま価値の化身となることで、これは意志支配に関連する。他方物化は、この秘密が人間の認識に与える幻影的形態で、価値の化身であることが、等価形態の商品の使用価値そのものの属性と見えること。詳しくは補論参照。

基本的人権論の虚偽性（グレーバー）

デカルトによるコギトの発見の現実的背景

ふたつの主体の相互関係についての現象学的解釈の限界

関係の把握における反照の弁証法→文化知

- 派生的な事柄の内容については、「政治運動と社会運動とを横断する新しい大きな物語を紡ぎだそう」を参照されたい。

補論：価値形態の秘密と謎ほか

1. 事物化<物象化>（Versachlichung）と物化（Verdinglichung）について。

前者は価値形態の秘密と関連し、後者はその謎と関連する。物象化という訳語は一般になじみがないので今後は「事物化」という訳語に統一したい。

この事物化は、初版の貨幣生成論を踏まえると、商品による商品所有者への意志支配だということが判明する。この観点が左翼には踏まえていない。しかし、この事態を認めれば、なぜ革命が起きないかを説明できる。それは意志支配という現実を知らずに、全面的政治暴露や説得で人を獲得できるという路線の失敗を説明できるからだ。つまり、そこには意志支配を無効にするような運動論がなかったのだ。

意志支配を無効にするような運動論は、貨幣生成を必然化する市場とは別に、貨幣生成を必要としないような交易関係を迂回して作るということに帰着する。市場からドロップアウトし、お金を使うことのない共同体はその事例である。しかし、そのような共同体が、市場に取って代わるためには、むしろ地域通貨のような試みが必要なかもしれない。

あとは共同体内部のもめごとの処理が重要な課題となる。そのためには革命後の政治、あるいは共同体の統治の解明とその実践が問われる。

2. 榎原均『「資本論」の核心』（情況新書、2014年）四 訳語上の難関より

「ところで日本で物象化論を提起するときに先にも少し触れたように、訳語上の難関に遭遇します。もともとマルクスの『資本論』は物象（Sache）と物（Ding）を別の意味に使用しています。そしてこの二つの用語の区別の上に、物象化（Versachlichung）と物化（Verdinglichung）の区別があります。ところが翻訳文化の盛んな日本で、『資本論』は長谷部文雄訳を除いた日本語版では全て双方とも物および物化と訳されていて、区別がつかないのです。大月書店から出ている全集版、新日本出版社から出ている新書版、また筑摩書房から出ているマルクスコレクション、中山元が新しく訳した日経BP社版、全てこの点では落第です。『経済学批判要綱』については旧版は訳し分けはしていませんが、一九八一年になって出版された『資本論草稿集』一、でやっと訳し分けにであえます。

マルクスがわざわざ別の用語を使って区別した理由を知ることが大事です。物象化については、人格の物象化と物象の人格化という表現があります。このようなことが起きる仕組みは物神性論で解明されているのですが、マルクスは他方そこでの課題を商品の神秘性や物神性の解明にもおいています。それで、物象化を物化と同じものと見なす考え方も生み出されてくるのですが、マルクスの構えは、物象化という事態があり、これが人間の意識に幻影的形態を反映させるという二重の考察にもとづいて、商品の物神性を解き明かしています。だから物化とは、この人格が商品に物象化されたときに人格の意識に昇る幻影的形態に関連し、商品の交換可能性という社会的力が、その物の自然的属性から生じているように見えることにもとづいて起きている事態のことを指しています。他方で物象化とは、人格が商品に意志支配されること自体を指しているのです。

この物象化と物化の違いをより分からなくするのが、ルカーチの翻訳です。ルカーチの『歴史と階級意識』（未来社、一九六二年）に収録されている第一論文の原語は、訳者の平井俊彦が「訳者あとがき」で述べているように「Verdinglichung」なのですが、平井はこ

の言葉を物象化と訳しているのです。ルカーチ自身は、物化の現象として、経済の物化、政治の物化、イデオロギーの物化を挙げており、そして物化の説明を『資本論』の物神性論での幻影的形態を論じた部分に依拠している（『歴史と階級意識』、一四～五頁）のですからこの第一論文のタイトルを「物象化とプロレタリアートの意識」と訳してしまっただけは物化を物象化と取り違えることで、物象化の意味が分からなくなってしまう。「物化とプロレタリアートの意識」と訳しておれば混乱は生じませんでした。ついでに最近出版されたルカーチの系統を引くホネットの訳書も『物象化』（法政大学出版局、二〇一一年）というタイトルですが、この本の表紙にはこの原語が表示されていて、「Verdinglichung」（物化）であることが容易に知れます。そしてこの本の中身も物化論が展開されていて、物象の人格化は問題にされてはいません。学者の仲間内では「Verdinglichung」を物象化と訳するのはまずいという気持ちがあって、わざわざ表紙に原語の表示がなされているというように理解できないことはありませんが、張一兵も主張しているように、これは決定的な論点ですので、シロクロははっきりすべきだと思います。」（『「資本論」の核心』、25～7頁）

政治運動と社会運動とを横断する新しい大きな物語を紡ぎだそう 寄稿論文最終章

革命後の政治解明のための課題の提起

革命後の政治を考えると、ひとつは政治運動の側から社会運動の方へと境界を越えて横断することが問われ、その際に迂回作戦という新しい路線についての認識が必要であること、その上に自主管理・自主運営のガバナンスが必要となり、万人が自治の企てをするような状態をつくりださねばならないこと、というように数えあげていくと、その大元にある思想的な問題の解決を迫られます。それが自己意識をどのように捉えるかという難問です。

リオタールの近代の大きな物語は、デカルト的自己意識（「われ思う、ゆえにわれあり」という有名な言葉にもとづく自立した個人の自己意識）が人びとをとらえていた時代の産物でした。ポスト・モダンとはデカルト的自我の崩壊が主張される時代でした。しかし、デカルト的自我の崩壊は論壇で論じられていただけで、その自我の崩壊を促進し、新しい人間像をつくりだすような社会運動は未展開でした。

たまたま私は商品とお金の弁証法的精神分析を始めているので、フェリックス・ガタリに注目していましたが、ガタリはデカルト的自我の代わりに、資本主義という機械に接続された機械としての労働力の担い手の自己意識を欲望機械と捉えて、このような機械への接続と自らの機械化によって、人間は、もはや統一した自我が持たなくなっていることを指摘しています。自我は一人の個人が構想する世界ではもはやなくて、個人を取り巻く資本主義という環境世界から機械的に構成されているのです。

われわれ古い人間はデカルト的自我を刷り込まれて育ちましたので、そこから脱却することは非常に困難です。どうやら古い政治運動や組織論は、デカルト的自我を統一し団結する形であって、デカルト的自我が崩壊した現代では、空回りせざるを得ないのでしょう。

さて、革命後の政治について、私はまだ定見を獲得しているわけではありません。いまだ探求途上の舞台裏を明かして共同開発の作業を提案したいと考えます。

デカルト的自我の再検討の試みとして、コミュニケーション論があります。ブーバーが提起した二つの「根源語」である「我—汝」と「我—それ」は示唆的です。人はまず他者と関係し、「我—汝」関係として接するのですが、やがて他者をモノとして利用する「我—それ」関係に移行してしまいます。こちらの方は我以外のものを経験の対象と捉える立場となり、デカルト的自我の領域です。他方「我—汝」の方は関係そのもので、ブーバーはこの関係そのものに人間性を見ているのです。そして、汝の二重化という現実の諸条件の

下で、「それ」の「汝」化を追求しようとしているのです。

あと、発話に注目した人としてバフチンがいます。伊藤守によれば、「言語活動（言語・発話）の真の現実とは、言語形態の抽象的な体系でもなければ、モノログとしての発話でもありません。ましてや、モノログ＝発話を産出する個的・生理的な作用でもありません。それは、ひとつの発話と多くの発話とによって行われる、言語による相互作用（コミュニケーション）という、社会的な出来事（共起・共存）です。」（伊藤守、小林直毅共著『情報社会とコミュニケーション』、中央経済社、二〇八頁）

つまり対話とは、情報伝達の仕組みというよりは、共存の場として開かれた社会的な生活そのものなのです。さらに伊藤は、「両者（グーバーとバフチン）が対話的な論理を問いかける際に、共通した原点に立っていることである。人間はけっして孤独な孤立した存在ではありえないこと、理性的な自立した個人という近代の原理が誤りであること、そしてそうした原理に立脚して構成された近代社会の社会的関係は、その内部に『非合理的』で『非人間的な』抑圧の体制を内在させているという認識である。これらの問題を析出し照射するものとして、コミュニケーションの理論が構想されたのである。」（同書、四〇～一頁）

グーバーにしてもバフチンにしても第一次世界大戦の惨状に直面して近代的原理の批判に向かったのですが、しかし、ここで伊藤が述べているような知見は、戦後経済の高度成長と消費社会の実現によって、すっかり忘れ去られてしまっています。「自立した個人という近代の原理」は現在も大手を振って通用しているのです。

近代的自我のもう一方からの批判はグーバーによってなされました。大著『負債論』（以文社、二〇一七年）の該当箇所を引用して何度も報告したのですがなかなか理解されません。それでここではみなさんに検討していただけるように、ほぼ全文を引用しておきましょう。

グーバーは、貨幣が生まれる前とそれ以降の負債についての考え方を歴史的に解明しています。貨幣が生まれる前の負債は借金ではないのですが、しかし人は基本的に何かを負って（つまり何かのおかげで）生まれ生存しているのです。グーバーは、自己の存在をなにに負っているか、ということについての古代人の考えを現代風に示して次のように述べています。

「彼ら（古代インドのブラーフマナの作者たち——引用者）による答えに（古代インドにも王や政府が確実に存在していたにもかかわらず）『社会』にも国家にも言及がみられないのは意義深い。そのかわり負債は、神に、賢者に、父に、『人間たち』に〔個別的に〕定められている。彼らの定式をより現代的な言語に翻訳することはさほどむずかしくはなさそう。そこで次のようにまとめてみた。結局、わたしたちが自己の存在をなによりもまず負っているのは、

・宇宙、宇宙の力、現代的にいいかえると＜自然＞に対して。わたしたちの存在の基盤にたいして、である。それに対する負債は儀式によって返済される。儀式は小さきわれわれを凌駕する存在すべてへの敬意と承認の行為である。

・わたしたちにとって最も価値ある知識と文化的成果をなしえた人びとに対して。人間の存在は、それらの知識と文化的成果によって、枠組みと意味、そしてまた形態をも受け取る。ここには私たちの知的伝統を創造した哲学者や科学者だけでなく、ウイリアム・シェイクスピアから中東のどこかでイースト菌入りのパンを発明したが忘れ去られたままの女性までふくまれる。それらの人びとに対する負債は、わたしたち自身が学習し人間の知識と文化に貢献することで支払われる。

・私たちの両親、およびその両親——つまり祖先に対して。じぶん自身が祖先となることで返済される。

・人類全体に対して。異邦人に対する寛容によって、人間的諸関係つまり生を可能なものにする、社会性にかかわる基本的なコミュニズムの土台を維持することによって返済する。

このように整理してみると、議論が前提そのものをむしばみはじめる。これらは商業的負債とはなんの関係もない。」(『負債論』、一〇一～二頁)

このように貨幣が生まれる前の時代の人々の負っているものへの返済の仕方について述べた後、グレーバーは貨幣が生まれ借金(債務)の返済を要求する倫理のなかに、すべての存在を取引の対象とするという意味で、宇宙や神との取引も想定していることについて次のように述べています。

「すでに万物を有しているゆえに神々との取引が不可能であるとすれば、宇宙との取引もまちがいに不可可能なのだ。・・・人類または宇宙から分離した存在としておのれをみただ、こうして一対一の取引を可能とする想定自体が、死によってのみ返答の与えられる犯罪なのである。わたしたちの罪責性は、宇宙に対する負債を返済できないことによるものではない。わたしたちの罪責性とは<存在するすべて、またはこれまで存在してきたすべて>と、いかなる意味であれ同等のものであると考えるほどおもしろいあがっているため、そもそもそのような負債を構想できてしまうことにあるのだ。」(同書、一〇二～三頁)

グレーバーの批判は、この万物との取引を可能とする負債についての考え方にとどまりません。さらに現代の確立された権威のすべてのシステムの欺瞞性について次のように述べています。

「今日の個人主義的な社会にふさわしいエートスを求めるとするならば、次のようにいえるだろうか。ひとはみな人類、社会、自然または宇宙に対して無限の負債を負っているが、べつのだれかが支払い方法を指示できるわけではない、と。これは少なくとも知的には筋が通っている。もしそうだとすれば、確立された権威のシステムのほとんどすべて——宗教、道徳、政治、経済、刑事司法体制——をそれぞれ異なる欺瞞の方法とみなすことができる。それらは計算不可能なものを計算できるとうそぶき、制約なき負債のうちのあるこれの部分をかくかくしかじかのように返済せよと指令する権限を詐称するにすぎないのだ、と。だとすれば、人間の自由とは、返済方法をどうしたいかをじぶん自身で決定するわたしたちの能力ということになる。

わたしの知るかぎりこれまでこのような発想をした者はいない。実存的〔存在的〕負債についての理論は、そのかわり権威の構造を正当化する——あるいは権威の座を主張する——手段に常に墮してきた。」(同書、一〇三頁)

このグレーバーの近代の権威システムへの批判をどう生かしていくか、その際に浮かび上がるのは市場の問題です。昨年関西大学で、酒井隆史さんをお招きしてグレーバー『負債論』をめぐる講演会を実施しました。その時の内容は、『情況』二〇一九年冬号に掲載されています。

この雑誌に寄稿を寄せた植村邦彦さんによれば、イヌイットたちは、野生動物を神とあがめ、そして、その神からの要請として、人間の共同体内部では、食べ物の分かち合いが行われ、分かち合いをしないと、神の掟に背くことになるというのです。植村さんは次のように述べています。

「ここで重要な論点は、『他の人びとと分かち合う』ことが、『人間と野生動物との互恵的な関係』という想像上の関係によって命じられた『適切な態度と意図』の表現だと理解されていることである。このような倫理的行動規範を逆から言えば、『他の人びととの分かち合い』が行われないと、人間と野生動物との関係は『互恵的』なものではなくなってしまい、野生動物の『再生』(つまり食物の再獲得)が保証されなくなる、ということである。」(植村邦彦「贈与と分かち合い——グレーバーの『負債論』をめぐる」『情況』二〇一九年冬号所収、一五七頁)

これと比べて、現在のお金は、市民社会の神の位置にあります。お金を神とあがめながら現代人はなにをしているかといえば、分かち合いではなくて、自己利益だけを追求しています。これは一体なぜなのでしょう、と植村さんは問題提起しています。

私はこの植村さんの問いにたいして、イヌイットが野生動物を神としてあがめたのは、自分たちの食べ物を持続的に確保しようという意志によるものであるのに対して、お金の

場合は人間の無意識のうちでの本能的共同行為によって生成し、そして、いったん生成したお金を神としてあがめる、という仕組みになっていることが関係しているように思います。

人間はもともと、共同体内では分かち合いを実現してきましたが、資本主義的市場社会になったとき、市場は資源配分能力をもっていますから、その自生的秩序にまかしておけば、社会全体の経済はうまく運営される、という市場信仰のもとに、個々人は勝手に振るまえばいいという、それまでの歴史にはなかった「自由」な個人が誕生することになったのですが、そのことが大いに関係していると思われます。つまり、ブーバーやバフチンの提起、さらにはグレーバーの問題提起を活かしていくためには市場批判との関連で問題をとらえる必要があるということです。そして革命後の政治も、市場をどうとらえるかという難問を解決しなければなりません。

大きな物語を紡ぎだすことは万人の課題

私は、革命後の政治の解明のために、意図的にナマの素材を出しました。それは、新しい大きな物語を紡ぎだすという課題の実現のためには、紡ぎ手が大勢の人々となることでしかなされえない、という認識からです。

私は、かつて「資本主義を超えるプロジェクト」を提起しました。それは次の通りです。

「このプロジェクトは次の五点の確認から始まります。

- (一) 資本主義を超えることが課題となっている。
- (二) そのためには、社会のあらゆる領域から超えていくデザインとプログラムとが構想され、それにもとづいた取組みがなされなければならない。
- (三) 多数のプロジェクトが必要である。しかしそれは世界中の意志ある人々の全員参加のプロジェクトでないと成功しないだろう。
- (四) 資本主義を超えるという問題意識をそれぞれの持ち場で具体化していくこと。
- (五) 差異を力に変えうる組織を生み出すこと。」(拙著『「資本論」の核心』情況新書、九～一〇頁、二〇一四年)

私の今回の提案は、この提起の延長にあります。かつてのように、どこかの知識人が物語を語るような時代は過ぎ去っています。大勢の人たちが物語を紡ぎだせるような技術的条件は、SNSなどの技術によって保障されています。問題は、大勢の人たちが新しい大きな物語を紡ぎだそうという意志を持ち、それを企てることです。この意味で革命後の政治の解明は、ひとりひとりの問題なのです。

ガタリの機械論

7月6日ガタリ研究会報告

少し長いので、目次を掲げておきます。

ガタリの機械論

1. 『アンチ・オイディプス』をどう読むか
 - (1) 絶対に理解不可能な部分がある
 - (2) ガタリにとっての分裂病者の言葉の重み
 - (3) 資本主義の分裂分析に絞る
2. 機械の概念の理解が鍵
 - (1) 機械という概念についての晩年の説明
 - (2) 機械についての初期の見解
 - (3) 新たな機械概念のマルクス主義との接合の試み
 - (4) 機械を主体との関係で位置づける

- (5) 機械と主観性との関係の解明へ
- (6) ガタリの機械概念への疑問

1. 『アンチ・オイディプス』をどう読むか

(1) 絶対に理解不可能な部分がある

私は、『アンチ・オイディプス』が理解できない理由として、次のポイントを拾い出しました。

- ① 機械という用語がなぜ使われているか？そこから派生している、脱領土化、脱コード化、器官なき身体、等々の意味は？
- ② スキゾ分析とは何か
- ③ 横断性、のちに動的編成（アジャンスマン）に代わるが、それらは何か
- ④ 主観性、主体性を問題にするときの主体とは

とにかくこれらのなじみのない用語が、その概念の説明抜きに使用されています。しかも、冒頭の出だし、第1章 欲望機械 第1節 欲望的生産 で展開されている内容が皆目わかりません。

そのわかりにくい理由を説明してくれている本を見つけました。それは、仲正昌樹『ドゥルーズ＋ガタリ＜アンチ・オイディプス＞入門講義』（作品社、1918年）です。仲正によれば、第1節には、分裂病者の回想録や、また分裂病者の作家の文学作品の内容からの引用や紹介がちりばめられています。道理で普通の論理的把握を拒否しているわけで、理解不能なのは当たり前なのです。つまりここでドゥルーズ、ガタリ（以下二人と記述）が試みているのは、分裂病者の認識を借りて、精神分析家の理性を批判しているのであり、同時に読者の理性の批判も意図されているのです。

このことが判明すれば、わからないところは、その原典である、分裂病者の原典を紐解けばいいわけで、二人がやっているように、前後の脈絡なく引用されたり紹介されても、それを理解しようとする自体が無理だったわけです。もちろん職業的精神分析家なら、原典に通じているわけで、部分的引用でも理解可能でしょう。しかし私たちにとっては、このようなレベルの教養については、人それぞれの興味に任せればいいことで、誰もかれもがこの分野に通じていることを期待することはできません。

ということでわからないところはすっ飛ばせばいい、という結論が出ました。とはいうものの、ゲオルク・ビューヒナーの「狂っていくレンツ」から借りてきた「機械」の概念だけは、わからないまますっ飛ばすわけにはいきません。レンツの言葉に依拠して二人は次のように述べています。

「レンツは、人間と自然が区別される以前に、あるいはこの区別を条件とするあらゆる指標以前に身をおいたのだ。彼は自然を自然としてではなく、生産のプロセスとして生きる。もはや、ここには人間もなければ、自然もなく、ただ一方を他方の中で生産し、もろもろの機械を連結するプロセスだけがある。いたるところに、生産する機械、あるいは欲望機械が、分裂症的機械が、つまり類的生命そのものが存在する。私と私でないもの、外なるものと内なるものとの区別は、もう何も意味しないのだ。」（『アンチ・オイディプス』上、16～7頁）

ここで「機械」という概念が、レンツの言葉を借りて展開されていますが、この「機械」という概念こそが二人の資本主義に対する分裂分析の中心内容であり、これは分裂病者の言葉だからといってすっ飛ばすわけにはいきません。

(2) ガタリにとっての分裂病者の言葉の重み

一部の専門家以外には理解しがたい『アンチ・オイディプス』の冒頭部分がなぜこのように書き下ろされたか、という疑問を解く鍵がありますのでそれを紹介しておきましょう。

ガタリは『分子革命』（法政大学出版局、1994年）で、分裂病者の存在について次のように述べています。

「われわれはいついかなるときでも権力構成体に取りかこまれている。われわれの社会ではあまり大仰な身ぶりをしてはならず、身のほどをわきまえ、しかるべき場所にサインし、送られた記号を認識し、正しい合言葉に耳をかたむけなければならない。そしてもし間違ふようなことがあれば監獄か病院行きというわけです。そこで、分裂病者を身体的に麻痺して保護監視下におかねばならない存在とみなすのではなく、むしろ分裂病者が苦闘しながら生きている社会的な場でどのように機能するか、そしてどのような横断的・図表的な問題をわれわれに投げかけてくるかということをつきとめよう（解釈しようというのではなく）とした方がいいと思われまふ。それは分裂病者をまねてみたり、緊張病患者を演じたりすることではなく、狂人や子供、ホモや娼婦などが社会的な場においてわれわれ「健常者」がふれようとしないう欲望の構成要素をどういう点でゆり動かすのかを明らかにすることにほかならぬ。狂人や子供などの身体で象徴的（前意味的）次元あるいは意味後的（ポストシニフィアン）次元のドラマが演じられているとして、それがどういう点でわれわれとかかわっているのか？われわれの機能は人を世界に適応させ、逸脱を治療することなのだろうか？おそらくわれわれが分裂病者を治療するためにいるという以上に分裂病者はわれわれに呼びかけるためにいるのではないか。・・・分裂病者は記号関係あるいは意味生産がわれわれの個人的な狂気や神経症をはるかに越え出た世界でもがいているのです。」（『分子革命』、189～90頁）

ここでガタリは分裂病者の存在やその発言を、社会の権力構成体の抑圧による不適応をみなして、その不適応のあり様から、社会の権力構成体の批判的認識に到達しようと考えているのです。

これに対して精神分析は、病者の治療を目的とし、オイディプスの仮説に依拠して、面談や自由連想から病者の精神の内面の葛藤に迫ろうとするのですが、二人は精神分析が前提にしているオイディプスの仮説そのもの（父-母-子を三頂点とする三角形）の批判を企てているのですが、その際に、病者の存在とその言葉を、欲望機械という、資本主義と身体を貫通する新しい概念によってなそうとしているのです。

(3)資本主義の分裂分析に絞る

二人のこの著書は、大部分が精神分析批判ですが、後半では資本主義の分裂分析が試みられています。私が注目するのはこの部分で、資本主義の分裂分析を踏まえた精神分析批判の部分は前回紹介しましたが、肝心の分裂分析については迂回が必要だということで持ち越しています。

先走って、注目すべき二人の資本主義の分裂分析の内容を引用しておきましょう。それは、第3章 未開人、野蛮人、文明人 の第9節 文明資本主義機械、のところ です。

「しかし脱コード化された流れが一点で遭遇し、ひとつの空間で時間をかけて接続することによってのみ、まさにここでもろもろの流れはひとつの欲望を形成する。この欲望とは、夢想したり欠如したりするかわりに生産するのであって、同時に社会的、技術的機械でもある欲望機械なのだ。資本主義とその切断は、単に流れの脱コード化によって定義されるのではなく、流れの全般的な脱コード化、大規模の新しい脱領土化、脱領土化した流れの接続によって定義される。」（『アンチ・オイディプス』下、23頁）

いきなりこれを読んで理解できる人はいないでしょう。脱コード化というのは、一定の名前がついているものの符号を変えるという意味でしょうか。そうすると、生産物が商品として売りに出されるときに価格がつきますが、そういうことも念頭に置かれているのかもしれない。なおかつ交換は使用価値の持ち手を代えますから、切断といえるかもしれません。でもこのような具体例で説明しきれぬような記述ではないようです。それは何よりも資本主義を欲望機械と捉えていることの理解が問われているのです。もう少し二人の述べることをコメントなしに引用しておきましょう。

「一方は脱領土化した労働者、自由な労働者になり、無一物で自分の労働力を売らなければならない労働者であり、他方は脱コード化した貨幣、資本となって労働力を買うことのできる貨幣である。」(同書、24頁)

「自由な労働者に関しては、私企業化による大地の脱領土化、私有による諸々の生産用具の脱コード化、家族と同業組合の解体による消費財の欠乏、最後に労働そのものにも機械にも役立つ労働者の脱コード化がある。——一方資本に関しては、貨幣の抽象作用による富の脱領土化、商業資本による生産の流れの脱コード化、金融資本と公的負債による諸国家の脱コード化、産業資本の形成による生産手段の脱コード化、等々である。」(同書、25頁)

「つまり資本主義と、それがもたらす切断は、また脱コード化したあらゆる流れの接続は、商業資本によっても金融資本によっても定義できないのであって、産業資本によって定義される。」(同書、26頁)

「資本主義的生産機械が組み立てられる以前でさえ、商品と貨幣は、その抽象作用によって脱コード化の働きを行っている。しかし、それは資本主義の場合と同じ仕方においてはではない。まず単純な交換は、それぞれの市場製品を抽象的労働単位の特別な量として登記する。交換関係に導かれた抽象的労働は、商品の外見上の運動の離接的総合を行う。抽象的労働はもろもろの質的労働に分割され、しかじかの規定された量がこれに対応するからである。しかし『一般的な等価物』が貨幣として現われるときはじめて、ひとは量的カテゴリーの支配下に入り、この量的カテゴリーは、あらゆる種類の特別な価値をもちうるし、あらゆる種類の量に相当しうる。この抽象量は、やはり何らかの特別な価値をもっていなくてはならない。」(同書、27頁)

ここで途方にくれないで、ガタリの単著を紐解きましょう。

2. 機械の概念の理解が鍵

(1) 機械という概念についての晩年の説明

『アンチ・オイディプス』には機械の概念が説明されてはいませんが、ガタリの単著である『精神分析と横断性』や『分子革命』ではその概念が説明されています。前者は二人の著作が出る前のものであり、後者は出てからのものです。

機械という概念について、後期のガタリの説明が述べられている『エコゾフィーとは何か』(青土社、2015年、原書、2013年)を見てみましょう。まずガタリは次のように語っています。

「機械というテーマはずいぶん前から私のなかに住み着いていますが、私にとってそれは概念的対象というよりも情動的対象です。」(『エコゾフィーとは何か』、103頁)

このようにガタリにとっての機械とは概念の対象、つまり資本主義の客観的存在様式ではなくて、主観のなかにある情動的対象なのです。もともと、ガタリがソルボンヌの学生だったころ(1950年代初頭)「機械についての機械論的なヴィジョンに対して非常に敵対的な態度をとっていました。」(同書、103頁)しかし、その機械論的なヴィジョンから脱して、新たな機械概念を打ち立てようとしたのです。

「実際、技術へののめりこみ、技術が時に含意する壊死的な次元から脱出するには、機械というものを把握し直すとともに概念化し直し、その虚無性をともなった惰性的存在としてのあり方と、主体的個体化あるいは集合的主体化という主体のあり方の交差点にあるものとしての機械という存在から出発しなくてはならないでしょう。」(同書、104頁)

ガタリがつくりだそうとした機械の新たな概念とは、機械を対象物として把握するだけでなく、それを主体のあり方を規制する主体の主観をつくりだす超対象的なものと捉えようとするのでした。

「機械のなかには、そして機械状の境界接触領域のなかには、人間的あるいは動物的な魂としての“アニマ”の次元ではなくて、原一主体性の次元に属している何かが存在して

いると考えようとしているのです。つまり機械のなかには、自己との関係と他性との関係を一貫して貫く機能があると考えているのです。私はこの二つの基軸にしたがって前進したいと思っているのです。」(同書、104頁)

ガタリは、私の解釈のように、機械という対象を、主観のなかでの存在というように一元化せずに、客観的对象としても把握しようとしていて、それでかえって分かりにくい説明を余儀なくされているように思われます。むしろ一元化した方がすっきりすると思われるのですが、そうではなく、また機械を魂をもった存在というように擬人化することなく、新しい概念に接近しようとしているのです。

「機械の問題をもっと一般的な問題、つまり<テクネー>、技術の問題の二次的要素とみなします。ここで私は観点を逆転したいと思うのです。つまり、技術の問題は、それよりもはるかにもっと広大な機械という問題系(プロブレマティック)の部分的要素にすぎないのではないかということです。このように考えた<機械>は、外部とその機械性の環境に開かれていて、社会的構成要素や個人的主体性とあらゆる種類の関係を保っています。したがって、こういったテクノロジー機械の概念を<機械状動的編成>という概念に拡大しなくてはならないでしょう。<機械状動的編成>というカテゴリーは、さまざまなレジスター(作動域)や存在論的支柱のなかで機械として展開するあらゆるものを包摂したものです。この新たな機械の概念は、<存在>と機械、<存在>と主体を対置するものではなくて、<存在>は質的に区別されるものであり、機械性ベクトルの創造性の結果にほかならない存在論的複数性に通じるということを含意しています。われわれは、機械的、社会的、人間的、宇宙的な存在者の総体に宿っている共通点としてのひとつの<存在>というものを持っているのではなくて、逆に、さまざまな歴史的転換期の刻印を施された異質発生的な存在論的世界“参照の宇宙”というものを繰り広げるひとつの機械をもっているものであり、こうした機会是不可逆性と特異性のファクターでもあるのです。」(同書、106頁)

ここで述べられた見解が、ガタリにとっておそらく機械についての最終的な概念規定でしょう。しかし、ここで語られている事柄も、なかなか理解しづらいものです。ガタリの機械概念について、歴史的にその発展を位置づけることから、その全体像を把握していきましょう。

(2)機械についての初期の見解

『精神分析と横断性』(法政大学出版局、1994年)には「機械と構造」と題する小論が収められています。これはラカンを念頭に置いた構造主義批判ですが、いまは、構造主義批判については検討しません。ガタリはこの小論で、機械を労働者との関係で位置づけようとしています。

「労働者の機械からの疎外は労働者を一切の構造的均衡から放逐し、ラディカルな切断——去勢といってもよい——システムに限りなく近い状態に移し入れる。」(『精神分析と横断性』、380頁)

資本主義のもとでの労働者の疎外を、ここでは機械からの疎外と把握しています。そして面白いのは次のような見方です。

「機械の労働の目からみたら、人間の労働というのはもはや無に等しいものでしかない。いや、近代的労働の特殊形態としての『無』に等しい労働というよりも、むしろ傾向としてはフィード・バックの労働であるといった方がいいかもしれない。つまり、どこか別のところで組み立てられたあれこれのしくみに応じて赤や黒のボタンをおすということであり、したがって人間の労働は機械の労働にまだ組みこまれてもいない残余にほかならないのである。

労働者、技術者、科学者の労働は、いずれそのうち機械の歯車にとらえられ、組みこまれることになるだろう。・・・人間労働は機械の労働の残余的部分集合にすぎないのである。残余的な人間の仕草は、もはや機械の秩序によって分泌される主体的過程の付属物・部分

的な過程でしかない。実際、機械が欲望の核心に移行したのであり、残余的な人間のしぐさは、個人の想像界全体に対する機会のチェック・ポイントでしかないのである。」(同書、381頁)

ここでは機械を労働の主体とみなして、その視点から人間の労働を見直そうとしています。このような見方からすれば、労働者は機械に接続された部分機械であり人間の欲望は機械の方に移され、こうして人間性は機械化された欲望として、欲望機械としてとらえられることになるのでしょう。

「機械の本質というのは、まさしく、構造的に確立された事物の秩序とは異質の、代表例としての、『微分装置』としての、原因をなす切断としてのシニフィアンの離脱の作用なのである。機械を、欲望する主体とそれに対応する様々な構造的秩序の最初の形態という二重の相貌の場所に結合するのはこの作用にほかならない。機械は単数の繰り返しとしてひとつの様式をなすものであり、個人的あるいは集団的な次元における一般性の秩序のなかで多様な主体的形態を一義的に代表する唯一可能な様式ですらある。」(同書、382頁)

このようにガタリは、機械の労働という観点から、人間的労働のそれへの従属を読み取り、そして機械という存在の一元的な支配様式として、資本主義をとらえようとしたのです。

(3)新たな機械概念のマルクス主義との接合の試み

ガタリの次の単著『分子革命』(法政大学出版局、1994年)では自らが打ち立てた機械の新しい概念と、マルクス主義の資本主義分析とを接合しようとしています。労働の疎外と機械に関しては次のように説明されています。

「欲望を労働から断ち切ること、これが資本の第一の要請にほかならない。政治経済学を欲望の経済から切りはなすこと、これが資本に仕える理論家たちの使命なのである。労働と欲望は明確に規定された生産関係、社会的諸関係、家族関係の枠組みのなかにおいてしか矛盾するものではない。すなわち資本主義と官僚的社会主義である。抑圧や心理=社会的コンプレックスと根底的・決定的に分離しているような欲望の疎外とか、心理=性的なコンプレックスは存在しない。」(『分子革命』、5頁)

マルクスの労働疎外論は、初期マルクスの『経済学・哲学草稿』で述べられていて、1つ目は、労働生産物からの疎外で、労働者が自分の労働で作った商品は、全て資本家のものになってしまいます。

2つ目は労働に対するやりがいからの疎外で、労働中の労働者はたいていの場合、苦痛や退屈さを覚え、自由が抑圧された状態にあります。

3つ目は類的疎外で、人類としての在り方から疎外され、生産手段の付属物になっているという状態が生みだされています。

4つめは人間(他人)からの疎外で、この社会では人間は自己利益だけを追求する経済人となり、他者との人間的関係は断ち切られてしまいます。

このようなマルクスの疎外論を踏まえて、ガタリはこの疎外を欲望の観点からとらえ返します。そうすると、疎外を中心は欲望と労働との切断だということになります。もともと労働とは労働する人間にとっては、欲望の実現過程でした。資本主義はこの本来の労働の目的を抑圧しているというのです。

「資本家の関心をひくのは、自らの搾取の機械に接続することができるような欲望と生産のさまざまな機械にほかならない。・・・あなたの腕・・・あなたの知的能力・・・この資本家のほしいもの以外のもの名において語るいっさいのものは、資本家の生産体制の秩序を乱すものでしかありえない。かくして、欲望の機械は工業的・社会的機械のうえにひしめいているのですが、それはたえず監視され、誘導され、互いに孤立させられて、枠づけられてしまう。したがって究極の問題は、人間の社会的条件に本質的に属するもの、当たり前のもものとみなされているこの人間を疎外する統制様式を乗り越えることができるか否かをつきとめることなのです。」(同書、6頁)

生産様式を機械とみなし、労働力もこれに接続される機械とみなす観点はこれでよくわかります。つまりガタリの階級支配についての認識は「欲望の機械は工業的・社会的機械のうえにひしめいているのですが、それはたえず監視され、誘導され、互いに孤立させられて、粹づけられてしまう。」というものです。

欲望を切り口にするこれらのガタリの発想は非常に面白く共感できますが、しかしなぜガタリのこの目論見が予定したようには実現しなかったのでしょうか。私の現在の立場からすれば、資本主義の生産様式への結合の仕方を「機械」とみることで、それが、意志支配の様式でもあることを見逃したのではないのでしょうか。そしてそれは、商品・貨幣についての分析の不十分性によってもたらされています。

機械による労働の疎外を解明した後、ガタリは資本主義による下部構造としての人間機械装置の組立てに視野を移します。

「労働の社会的分業は巨大になる一方の生産集合体の形成をもたらした。しかしこの生産の巨大化は、同時に、産業、経済、教育、情報などの機械装置の配備のなかで作動させられる人間部品の分子化のたえざる強化をひきおこした。活動するのは決して人間ではなく、器官と機械の配備なので、同じことは欲望についてもいえるのです。もはや人間が人間と直接通じあうというのではなくて、器官や機能が機械装置の《組立て》に関与して、その《組立て》が記号のつながりをつくりだし、物質的・社会的な流れの一連の交差を連結するという事です。生産諸力に含まれる機械による奴隷化の技術によって人間の伝統的な属領は吹き飛んでしまったのと反対に、生産諸力そのものは今日欲望の《分子的》エネルギーを解き放つことができる。このような機械＝記号の革命のもつ革命的射程はまだとらえきることのできないものです。」(同書、34頁)

社会的分業は巨大な生産集合体をつくりだしていますが、その機械装置によって作動させられる人間は、人間的欲望から切断され、機械の欲望に接合されて欲望する機械として疎外された状況にあります。それは他方で、人間の分子化をもたらします。これはある種の革命ですが、それを推進している機械＝記号による革命は今後どうなるのかについて、ガタリはまだとらえきれない、と述べています。

「マルクス主義の抽象的価値概念は交換価値の生産のために配属された人間労働の総体を超コード化した。しかし資本主義は目下、いっさいの使用価値が交換価値になり、生産労働全体が機械主義に従属するという方向に向かっている。交換を司る磁極そのものが機械主義の方に移行し、コンピュータが大陸をまたにかけて対話を行い経営者に交換の条項を指図する時代なのである。オートメーション化しコンピュータ化された生産はもはや人間としての基礎的ファクターをもとにして一貫性をひきだすのではなく、人間のあらゆる機能、活動を貫通し、粹づけ、分散させ、極小化し、とりこむ動物のような機械状組織から一貫性をひきだすのである。」(同書、57頁)

資本主義を人間をもとりこんだ機械状組織と捉えることで、ガタリは資本主義によるIT技術の開発と応用、そしてそれに基づく資本主義の新たな形でのグローバルな発展をとらえる方法を獲得したようです。『分子革命』で述べられている「統合的世界資本」の概念がそれですが、この検討は次の号に譲り、もう少し機械概念の解明を続けましょう。ガタリは、労働と機械の関係について次のように述べています。

「資本主義権力は直接的強制力を発動する伝統的システムにくわえて、ひとりひとりの個人の共謀とまでいかなくとも少なくとも消極的合意を要するコントロール装置をたえずつくりだしていく。しかし資本主義権力の行動手段のそのような拡張は、それが人間の生や活動のバネそのものに影響をもちうるのではないかぎり不可能である。手段の極小化はこの場合技術的機械主義のはるか手前にある。資本主義機械——その《不可視》の脱属領化した部分はおそらくもっとも恐るべき有効性をもっている——は人間の知覚的、感覚的、情緒的、認識的、言語的等の行動の基本機能に接続されるのである。イデオロギー的な欺瞞あるいはマゾヒスト的な集団情念——それがいかなる性格のものであれ——をもとにした大衆の隷属の理論的説明をわれわれは受け入れることができない。資本主義は人間を内

部からとらえて支配する。イメージや思想を手段にした人間の疎外は、個人的ならびに集団的な人間のおこなう記号化の基本様式の一般的隷属システムの一局面にすぎない諸個人は工場や学校や地区などと同じく、欲望の知覚や規格化の様式を、《装備》されている。」(同書、70～1頁)

ここでガタリが述べている、資本主義の支配を権力やイデオロギーやマスメディアなどが醸し出す欺瞞の装置に力点を置くのではなく、「資本主義は人間を内部からとらえて支配する」ことに注意を促しています。その支配をガタリは機械概念に基づいて捉えようとしているのですが、それはどのように展開されているのでしょうか。

「機械性の隷属化は社会的隷属化と符合するものではない。社会的隷属化は容易に操作しうる全体的な諸個人、主観表象をひき入れるのに対し、機械性の隷属化は層状態化した社会的諸関係のなかで《固定する》のがはるかにむずかしい欲望の分子的経済に应ずるかたちで、個人や社会の土台をなす要素を配備する。そのようにして知覚的機能、情緒、無意識的行動などを直接作動させることによって、資本主義は社会学的な意味における労働者階級の労働力や欲望の力をはるかに凌駕する労働力や欲望の力を掌握する。そうした状況のもとでは、階級諸関係は従来とは異なる展開の仕方を見せる。つまり階級諸関係は以前ほど二極対立的ではなくなり、複雑な戦略を誘発する傾向をいちだんと強める。」(同書、72頁)

ガタリは、資本主義の人間を内部から支配する様式を、ここでは「機械性の従属化」とみなし、それを「社会的隷属化」と区別して、従来の生産様式のそれとは異なる支配の様式として、この資本主義による新たな形での人間の内面支配を捉えているようです。そしてここから、階級闘争変容についても捉えようとしています。

「資本主義世界の組成構造は貨幣的記号、経済的記号、威信記号などの多数の脱属領化した記号からなっている。意味や社会的価値(翻訳可能なもの)は権力構成体のレベルで発現するけれども、資本主義は本質的には無意味の機械に依拠している(例を挙げるなら株式市場の無意味の格子記号)。資本主義権力は経済レベルにおいて言説を行使することはなく、無意味の記号機械を統御し、システムを支える無意味の歯車を操作しようとするだけです。」(同書、188頁)

ガタリは「機械性の従属化」の内容をこのように「脱領土化した記号」＝「無意味の記号機械」による「無意味の歯車」と化した人間に対する内面支配と捉えているようです。

この点に関して訳者の杉村昌昭さんは、あとがきで次のように述べています。

「ただし、とくに資本主義システムの抑圧性の解剖の試みとしてはかなりの説得力があるけれども、逆に資本主義システムの“欲望の解放”の“たくらみ”の分析については、今一つ物足りない気がする。このことは、ガタリが官僚的社会主義という名称で一括している現行社会主義の諸形態をどう超えるかという、新しい社会主義の内実の問題と深くかわってもいるだろう。」(同書、327頁)

私は、この杉村さんの指摘は、資本主義による人間の内面支配についての説明が不十分だということとして受け取りました。「欲望の解放のたくらみ」の解明については、商品とお金の弁証法的精神分析が必要だと考えています。ガタリが指摘している「機械性の従属」のもっと奥にあるのが、商品という事物(物象)がもつ人間に対する意志支配(人格の事物化、事物の人格化)だと私は考えています。

(4)機械を主体との関係で位置づける

『機械状無意識』(法政大学出版局、1990年)の序論、ロゴス、それとも抽象機械か には新たな論点が提示されています。それは「機械性の従属化」を「機械状無意識」と捉え直して、それとロゴスとの関係を問うているのです。まず、ラカンの無意識論、「言語活動と同じく構造化されたもの」という把握では、無意識をロゴスと捉えていることにはなるのですが、ガタリはそうではなくて、「無意識に『機械状無意識』というラベルを貼りつける」(『機械状無意識』、4頁)と言っています。そして、相互作用現象の探求を始めています。

「相互作用現象もまた『機械状』と形容したい。・・・超越的プラトンのアイデアでもなく、無形状質料に併存するアリストテレス的形相でもなく、こういった脱領土化された抽象的な相互作用現象、あるいはもっと簡単に言ってこういった抽象機械こそが、現実のさまざまなレベルを横断し、層状化作用物を組み立てたり解体したりするのである。それらはある唯一の普遍的な時間ではなく、ある内実平面に繋ぎ止められるのであって、この内実平面はトランス - 空間的およびトランス - 時間的であり、それらに相対的実在係数を付与するものである。そのためにそれらが現実物の中に『出現』するときにはもはやただ一つの支持物を選ぼうとするのではなく、定量の可能物をもとに取引をする。」(同書、5頁)

これまで機械は労働や資本との関連で考察されてきましたが、ここでの抽象機械が繋ぎ止められている内実平面とは市場のことを念頭に置かれているのではないのでしょうか。市場は商品の価格を決定する場であるし、また金融資産が取引される金融市場では、資本の増殖が行われます。

「形相に関して二つの態度、二つの政策が可能である。一つは形式主義者の立場・・・もう一方は、社会的形成物と物質的アジャンスマンから出発し、そこから人間や宇宙の歴史が提供するような記号論的諸成分と抽象機械とを抽出(抽象)しようとする。この第二の方法においては、ある一定期間中、『自然的』コード化作業と記号機械との間にある種の『偶発的な』つながりが打ち立てられることとなるであろう。ところがこのつながりを、それらの発話行為の中心を成す諸アジャンスマンと切り離して考えることは不可能であろう。それはひとがすぐそう呼びたくなるような再 - 発話行為ではないのである。実際ここにはいかなるメタ - 言語も存在しない。集団的発話行為アジャンスマンは『じかに』事物の状態、事実の状態、主体的状態に向かって語りかけるのである。一方で『空白』の中で語りかける主体も存在しないし、他方で『充満』の中で語りかけられる客体も存在しない。空白も充満も同一の脱属領化効果によって『機械の如く操られ』ている。諸関連は、『自然』の事物と言語活動の事物とが脱属領化される地点においてしか可能とはならず、抽象的機械装置と具体的アジャンスマンとが日付と場所をもち自分たちの脱領土化作用という関連を可能とする地点においてしか可能とはならない。」(同書、9～10頁)

物質的アジャンスマンという概念も、市場が念頭に置かれていると考えると何となくガタリのここでの思考も理解できます。脱領土化作用は、商品交換における使用価値の持ち手の交換だと考えられるし、自然的コード化作用と記号機械のつながりということも、商品の価値の貨幣による表示が念頭に置かれているように思われます。それにしてもこのような事態をなぜこのような凝った考察をするのか、そこはまだ私の理解が行き届きませんが。

「抽象機械は、実在する諸層状化作用物に『外部から』張り付こうとしにやってくるコード化のシステムのように機能するものではない。先ほど私が言及した脱属領化作用という一般的運動の枠内で、抽象機械はいわば変化の素材——私が『選択素材』を呼ぶもの——を構成する。それは、生物界においても無生物界においても、諸関連物、諸脱層状化作用物、諸再属領化作用物に触媒作用を及ぼす可能物の結晶によってできている。要するに、抽象機械は、脱領土化作用が、そのあらゆる形態下において、諸地層や諸領土の存在に『先行する』という事実を跡づける。」(同書、11頁)

ここでガタリは、資本としての価値の運動と、市場におけるそれとを叙述しようとしているのではなんでしょうか。ここでの抽象機械とは、抽象的人間労働が念頭に置かれた資本価値や商品価値のあり方を叙述しようとしていると思われます。

「機械状諸分子は最も分化した諸アジャンスマンへと導くコード化の鍵を担いうる。『最も複雑なもの』への到達は、これらの分子的機械装置がより一層脱属領化されているか、より一層抽象的であるかという点に一般的に依存しているとさえ思われる。

もし本当に、抽象機械が主体 - 客体という現象学的対にも、集合 - 部分集合という論理的対にも属さず、その結果明示的意味 - 表象 - 意味作用という記号学的三角形をも逸脱するものであるとすれば、何であれそれに関して述べる機会を一体どのように頭に浮かべ

ればよいのであろうか。その機会を手に入れる主体がそこにいなければ表象は一体どうなるのであろうか。同じだけの困難な問題とともに、われわれには記号論化作様式の規定自体の再検討を迫られるのである。」(同書、12頁)

このように問題提起した後、ガタリは記号論の再検討、さらには分裂分析のための方法論などの考察を行っていますが、それは機械概念の領域をはみ出してしまうので、今後の課題としておきましょう。

(5)機械と主観性との関係の解明へ

『分裂分析的地図作成法』(紀伊国屋書店、1998年)では、機械の概念が、主観性の形成過程を問題にしていることがより鮮明になってきます。まず、序文では次のように問題提起がなされます。(この翻書では、「主観性」が「主体性」と訳されています)

「こんにちわれわれは、主体性の生産についてどのように語るができるだろうか。まず第一に、主体性のもろもろの内容が、非常に多くの機械状システムに常に依存していることを認めるべきである。・・・したがって、主体の本質——西洋哲学が数世紀にわたって追い求めてきた例の本質——が、この主体性の新たな「機械への依存」によって脅かされているのではなかろうかと問うことにさえなる。」(『分裂分析的地図作成法』、9頁)

このように問題提起したガタリは、次に、二つのテーマを掲げています。

「1 現在の情報・通信機械が、表象的内容を伝えることに満足せず、(個人的そして/または集団的な)表現作用の新しいアジャンスマンの作成にも等しくかわること。

2 あらゆる機械状のシステムが、技術的、生物的、記号的、論理的、抽象的などのどのような領域に属していようとも、それら自体で、私がモジュール的主体性と呼ぶ原主体的プロセスの支えであること。」(同書、10頁)(注)アジャンスマン：鎖列、組み込み、動的編成、アレンジメント

ガタリは、この二つのテーマを次の三つの系列から解明しようとしています。

「1 権力の声。この声は、身体に対する直接的な強制や一望監視的支配によってであれ、魂を想像的に掌握することによってであれ、人間のもろもろの集団を外部から取り囲み、限定する。

2 知の声。この声は、科学技術的・経済的な実践において、主体性の内部から構成される。

3 自己準拠の声。この声は、固有の座標によって自己を根拠づけ、自己共立性を有するプロセス的な主体性(私が最近「主体集団」というカテゴリーに結びつけたもの)を発展させるが、この主体性が社会的・心的なもろもろの層に対して横断的に作り出されることを妨げるものではない。」(同書、12頁)

これら三つの系列についてガタリはその概要について次のように述べています。

「権力の声と知の声は、それらの外延的用法と意味の正確な範囲とを保証する、外部準拠の座標に記されている。土地は身体と住民に対する権力基盤の準拠対象であり、資本は経済的な知と生産手段の支配の準拠対象であった。しかしながら、図もなければ地もない自己準拠の器官なき身体は、あらゆるかたちの創造性が絶えず出現し続ける点とみなしうるプロセス性という、まったく異なる地平をわれわれに示してくれる。」(同書、15頁)

このようにガタリは、三番目に挙げた「自己準拠の声」に注目し、それを新たな主観性形成の条件とみなしています。そしてこの条件について次のように述べて、期待を表明しています。

「(パリコミュンなどの革命とは異なって)今日われわれの手が届くところにある主体性の自己価値化と自己組織化という個人的・社会的な実践こそが、おそらくは歴史上はじめて、愚かであつかの間の自然発生的熱狂状態よりも永続的な何かに、つまり機械環境と自然環境との関係において人間を根本的に位置づけなおすことに通じているのだ(機械環境と自然環境はひとつになっていく)。(同書、17頁)

ところがこの期待が裏切られるような現実が、現代という、知識と技術の資本主義的な

脱テリトリー化の時代には存在します。

「ここで人間は、今までは終身的に保証されていると思っていた社会的なテリトリー性を失うだろう。物質的・社会的な人間の身体性の基準点は、もはや分割的なテリトリー制ではなく、機械状のプロセスによって転覆させられた人間活動と構造を記号的に再テリトリー化する様態としての資本である。・・・権力のもろもろの抽象的価値の記号的な資本化である。・・・今や人間は、機械状の門にほとんど寄生的に隣接した位置にいる。人間の器官や社会関係のひとつひとつが結局は切断し直され、システムの全体的な要求に応じてふたたび情動化され、重層コード化されるだろう（このような身体の再構成の最も印象的で先駆的な表象は、レオナルド・ダ・ヴィンチやブリューゲル、とりわけアルチンボルドの作品に見られるだろう。）」(同書、21～3頁)

この地球規模の情報化の時代に、主観性の形成は、従来のそれとはまったく異なった形で成されていますが、その特徴についてガタリは次のように述べています。

「ここでは、前の時代の偽りの平衡は、まったく違った意味で失われることになる。今や機械は主体性によって制御されつつあるのだが、この主体性は再テリトリー化された人間の主体性ではなく、新しい種類の機械状の主体性なのである。」(同書、24頁)

機械状の主体性の現実についてガタリはさらにダメ押し的に確認しています。

「こんにち主体性は、権力と知の装置によって大規模に制御されるがままになっているが、その装置は、技術的・科学的・芸術的改革を、社会の最も逆行的な諸形態に従わせる。しかし、主体性の生産の別の様式——プロセス的で特異的な様式——を考えることも可能である。明日には、この実存的再調和と自己価値化という新たにとって代わる形式が、われわれの生きている時代に特徴的な致死性のエントロピーに身を任せることを拒む人間集団と個人との、生きる理由となりうるのだ。」(同書、31頁)

このようにガタリの一貫した問題意識は、機械が植え付ける主観性の変革を、この植え付け方の解明から展望しようというものです。彼が、『分裂分析的地図作成法』のような本を書いたこと自体がこの問題意識をあらわにしています。けれども私の見るところ、このガタリの試みは成功しているようには思えません。その理由について考えてみましょう。

(6)ガタリの機械概念への疑問

ガタリの機械概念には、資本（根本的には商品から貨幣生成過程での意志支配に根拠をもつ）による意志支配（事物化<物象化>）が見逃されているように感じます。ガタリは明示してはいませんが、資本主義を機械と捉える発想は、ルカーチが『歴史と階級意識』（未来社、1964年）で述べた物化論の影響下にあるように思われます。ルカーチの理解には、資本主義の下での物神性の発生の原因である、物化についての理解はありますが、意志支配を生み出す事物化（物象化）についての理解がありません。ヨーロッパの『資本論』における物化や事物化の研究はルカーチどまりでそれを超えるような研究は現在でも見当たりません。この状態が、ガタリの機械論が物化の次元でしか展開できなくて、意志支配の領域に入っていけない原因ではないでしょうか。

以下のガタリ批判は、研究会会報には掲載しませんが、ガタリ研究会ではぜひ議論したい論点なので、箇条書きですが、討論の素材として提起します。

① 機械とはルカーチが『歴史と階級意識』で述べている資本主義の元でのいっさいのシステムの物化に着想を得ているのではないか。ルカーチは一時期はやっていた（注で引用したホネット参照）。

② ルカーチは人と人との関係であるシステムが物化することで、自然科学並みの把握が可能となり、そしてシステムのなかでのプロレタリアの地位も把握可能で、従属という地位にある労働者は、自らの不当な地位を理解し、その知識に基づいて階級へと形成できる、という理解だったが、これは現実には裏切られっぱなしだった。

③ そこでガタリは、主観性を資本主義が作り出すものと捉え、機械の概念を拡張して、

資本と賃労働の関係を総体として機械と捉え、これを、資本主義のなかにある主観性をつくりだす実体的な存在と捉えて、この観点から人間を欲望機械と把握して、この機械が人々にどのような主観性を刻印していくかということについての分析を、スキゾ分析と捉えてその方法を模索した。

④ ガタリはその職業から精神障害者と日常的に付き合っていて、資本主義が作りだす主観性のモデルは彼ら病者の意識から合成した。

⑤ ガタリのスキゾ分析とは、資本主義がそこで生活している人々の意識にどのような内容を植え付けていくかの分析であり、機械のさまざまな機能は、主観性のなかでの意識内容であって、決して客観的存在論ではない。客観的存在論は、マルクスの『資本論』で事足りるという理解なのではないか。マルクス主義に足りないのは欲望の理論である、他方欲望の理論として存在しているフロイト主義は、神経症を対象としていて、分裂症には当てはまらないので修正が必要である、だいたいこんな感じではないか。

⑥ つまり、『アンチ・オイディプス』で展開されている内容を、普通は資本主義の客体の運動として把握するのだが、そうではなくて資本主義が作りだす、主体の主観の運動として彼らは述べているのではないか。

⑦ そうだとすると、主体についても、客体を認識するデカルト的主体という統一的な自我ではなくなる。ある意味デカルト的主体は資本主義の方であり、それが自らの認識を横断的、動的編成によって、主観性というスクリーンに反射させている、人間はスクリーンなのだ。

(注)

アクセル・ホネット『物象化 (Verdinglichung)』(法政大学出版局、2011年) ノート序文

「Verdinglichung という概念は、前世紀の 20 年代および 30 年代において、ドイツ語圏の社会・文化批判をリードするテーマだった。」(『物象化 (Verdinglichung)』、9 頁)

ルカーチ『歴史と階級意識』の原書は 1923 年刊行。

「しかし第二次大戦終了後は、Verdinglichung というカテゴリーが時代診断において有する中心的位置は損なわれた。ホロコーストがもたらした文明の崩壊が大仰な社会診断へとむかう思弁的傾向を麻痺させられてしまったかのように、社会理論家や哲学者たちはこぞって民主主義や司法の欠損についての分析で満足し、今さら Verdinglichung や商業化といった病理概念を利用しようとはしなかった。」(同書、10 頁)

例外はアドルノと学生運動

「Verdinglichung とちよっと言っただけでも、それは、戦後の時代や文化的革新、理論的更新をを通じてその正当性を喪失してしまった一つの文化的時代にかたくなにしがみつこうとする徴候のように思われたのである。

それにもかかわらずごく最近になってようやく、こういった状況がもう一度変化するかもしれない兆しが増してきた。すなわち、哲学的に未消化だった一片のように、Verdinglichung というカテゴリーはヴァイマル共和国という深淵から回帰し、あらためて知的討議の舞台に登るのである。」(同書、10 頁)

「それは、他の主体がその人間的特性によってではなく、感情のない死せる対象のように、まさに『モノ』や『商品』として扱われるがゆえに、われわれの道徳的、倫理的原則に反する人間の態度のことである。そして、そのような規定によって関連づけられる経験的現象には、ますます増大する代理母の利用や恋愛関係の市場化、セックス産業の爆発的発展などのさまざまな傾向が含まれている。」(同書、12～3 頁)

「もちろんルカーチによる Verdinglichung の分析も、道徳的な語彙は完全に放棄しているとはいえ、規範的内容をもっている。結局、Verdinglichung という概念を使用することがすでに、述べられた現象において、世界に対する『本来の』もしくは

『正しい』形態の態度についての錯誤が問題であるという想定を表しているのである。」
(同書、14頁)

商品という社会的象形文字を読む(改訂版)

2019年6月29日 境 毅

はじめに

今から、『資本論』初本文価値形態論を素材にして、商品という社会的象形文字を読む作業に入ります。別に『資本論』を読んでいなくても構いません。商品や貨幣(お金)は、私たちが毎日毎時つきあっているものであり、日常でありふれたものです。ただ、商品を社会的象形文字として読むには、いくつかの約束事があります。商品を社会的象形文字として解説するとは、言いかえれば、社会の中の市場に存在している商品と貨幣の関係を、文字として読むということです。その際に、貨幣も商品であり、したがって、まずは、貨幣が登場しない商品の関係を考えます。これは、例えば、1万円のシャツ5枚は、5万円の上着と同じ価格ですから、5枚のシャツ＝一着の上着、と表現できますね。これが商品の価値形態の基本形です。

価値形態論を始めて解明した、マルクスの、『資本論』初本文の価値形態には、四つの種類があります。私は、この四つの価値形態に、新しく三つの形態を付け加えました。初本文価値形態論では、貨幣形態は登場しないですから、交換過程での、人格が介入することによってなされる貨幣の生成によって成立する、貨幣形態を第V形態としました。そして、さらに、私のアイデアである、第IV形態を転倒したものを、第VI形態とします。最後に、第VI形態が、その進化過程で商品交換をのりこえた形を、第VII形態としました。再度確認しますが、マルクスが述べているのは第IV形態までで、あとの三つの形態は私が付け加えたものです。では、この七つの価値形態に即して説明していきましょう。その際、『資本論』で書かれている内容とはあまり重複しないかたちで、単に象形文字を読むという観点から考察します。

A)第I形態(簡単な価値形態)

X量の商品A=Y量の商品B

先に述べたように、価値形態とは商品と商品との関係をあらわしたものです。等式を使っていますが、数学とは違って、等式の両辺にはそれぞれ意味があります。この場合、商品Aが自分の価値を商品Bで表現しているということで、左辺は相対的価値形態、右辺は等価形態と名付けられています。左辺の商品Aは、自分の価値を右辺の商品Bで表現している、ということなのです。平たく言えば、商品Aの価値は商品Bに値する、ということです。

ここでの問題は、商品Aが、自分に商品Bを等置しているのか、それとも、自分を商品Bに等置しているのか、ということです。後者だと、商品Aは商品Bを同等化しているということで分かりやすいし、それはこの等式を、主語＝述語という論理式として読んでいくことになります。しかし、ここではそうではなくて、商品Aは、自分に商品Bを等置しているのです。いわば相手に判断をゆだねているのですね。つまり自分だけでなく、相手も主体として扱っているのです。

このところは、今村仁司が『暴力のオントロジー』（勁草書房、1982年）で、商品Aが、自分を商品Bに等置していると読んで、これを暴力の始まりとみなしました。それは、初版の誤訳に基づくもので、商品Aは、自分を商品Bに等置しているのではなくて、逆に自分に商品Bを等置しているのだということは、私には、80年代からわかっていました。ところが、相手を主体として扱っているという理解には至らず、批判できないでいました。しかし、第I形態が、自分の価値を相手に判断してもらうという関係、つまり相手を歓待する作法がそこにはあることが分かれば、ここは暴力の始まりではなくて分かち合いの関係なのですね。（このことに気づいたのも昨年末でした。今村説はおかしいと思っていましたが、30年ぶりに批判できました。）

私は、この二つの読みの違いを言葉で表現しようと努力してきました。しかし、これは、無理な試みだったことが分かりました。商品Aが、自分を商品Bに等置する、という読みは、二つの商品の異なる使用価値が、同じものだという判断が含まれています。この判断は端的に誤りなんですね。他方、商品Aが、自分に商品Bを等置している、という読みの場合は、異なる二つの使用価値とは別の共通なものをこの等式は表現しているのです。

マルクスは第I形態の分析では、この共通なもの、人間労働が、二つの商品の関係でどのように抽象化されていくかという事態抽象の仕組みを明らかにしているのですが、それは、実は、主体と主体との反照関係の分析でした。ここでは、読み方の違いを指摘して置くにとどめます。

B) 第II形態(全体的な価値形態)

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

ここでは、商品Aは、さまざまな商品を主体として扱っています。そうすることで商品Aの価値が、さまざまな具体的労働で表現されていることになり、それらの労働の違いが、この事物相互の関係で抽象されて、商品Aが、この関係では、共通な抽象の人間労働として表示されていることが読み取れます。

つまり、第I形態の分析では、思考によって事態抽象の仕組みが解明されましたが、ここでは、商品を社会的象形文字として読むことで、事態抽象という仕組みが働いていることが分かるのです。

C) 第III形態(一般的な価値形態)

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} X \text{ 量の商品 A}$$

第II形態を逆から見れば、この第III形態となります。ここでは、商品Aは、他のすべての商品の等価物であり、したがって、諸商品の一般的な等価物として表示されています。一般的等価物としての商品Aの表示は、商品A以外のすべての商品が、共同して商品Aを主体として扱っていることの結果です。また、ここで相対的価値形態にある諸商品は、商品Aを仲立ちにして、それぞれがつながり合えます。ここで諸商品は始めて、社会に通用する形態を獲得したのでした。『資本論』現行版の価値形態論では、次の第IV形態は、一般的等価物が、さまざまな商品から金に固定された、貨幣形態となっています。貨幣は、人格の関与のない価値形態論の領域で生成するという誤解が生じます。ところが、初版本文には、他には見られない、次の第IV形態が続きます。

D)第IV形態(初版本文第IV形態)

X 量の商品 A =Y 量の商品 B
 =Z 量の商品 C
 =W 量の商品 D
 =.....
Y 量の商品 B =X 量の商品 A
 =Z 量の商品 C
 =W 量の商品 D
 =.....
Z 量の商品 C =X 量の商品 A
 =Y 量の商品 B
 =W 量の商品 D
 =.....

この第IV形態は、『資本論』初版本文価値形態論にだけ登場しています。この社会的象形文字は、所有者が登場しない、商品の価値形態論の領域だけでは、貨幣は生成されず、商品の交換過程での人格（商品所有者）の登場を待つことで、貨幣が生成されるということを表示しています。つまり、すべての商品が、相手を主体として扱うと、商品世界の統一的秩序は生まれない、という意味を表現しているのです。

E)第V形態(交換過程での貨幣生成)

X 量の商品 A =
Y 量の商品 B =
Z 量の商品 C =
..... =

} V 量の金

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させます。この人格は、「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）です。交換過程に登場する商品所有者は、第IV形態を受けて、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成します。人格が介在しなければ貨幣は生まれることはないのです。この点が、現行版『資本論』では隠されています。

この、初版の貨幣生成論によれば、たとえば、トヨタが車に 100 万円の価格をつければ、その裏にトヨタがまったく自覚せずに、金を貨幣とする無意識のうちでの本能的共同行為に、参加していることが分かります。つまり、貨幣は、生産物が商品として交換過程で価格をつけて送り出されるつど、生成されているのです。ここから、貨幣を生成しないような人間の関与の仕方、を構想できるのではないのでしょうか。私が付け加えた次の二つの形態はその素材です。

F)第VI形態(だれもが貨幣形態になりうる=地域通貨)

一枚の上着 =
一〇ポンドの茶 =
四ポンドのコーヒー =
..... =

} 二〇エレルのリンネル

二〇エレルのリンネル =
一〇ポンドの茶 =
四ポンドのコーヒー =
.....

} 一着の上着

ニ〇エレルのリンネル	=	}	一〇ポンドの茶
一枚の上着	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....	=		
	=		

現実には、第IV形態の矛盾は、交換過程での、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、貨幣生成の運動として、解決されています。しかし、第IV形態は、貨幣を生成しないもう一つの経済を暗示している、と読みとれないでしょうか。この観点から、第IV形態を転倒させて第VI形態を描いてみましょう。この形態で等価形態にある商品の所有者たちは、どのような社会的関係をもつのでしょうか。

その一つが地域通貨です。地域通貨の場合は、自分の生産物で、他の人の商品が買えますが、それは地域通貨のメンバーが、共同体を構成しているからです。ある意味で、地域通貨は共同体内部の人々が、それぞれ貨幣を創造することで成立している、と見る事ができることが分かります。

また、ここでは、主体相互が分かち合える関係の萌芽が、作り出されていると想定できないでしょうか。主体相互の分かち合いが可能な社会システムが、この第VI形態で示唆されていて、それへの移行が展望できるのではないのでしょうか。というのも、この形態は資本主義の下でも実現可能です。そしてこの形態の占める領域が拡大していけば、現在の主流である貨幣形態の占める領域が狭まっていくでしょう。

また、金融インフラがIT技術の発展で、変貌してキャッシュレスが実現しつつあり、スマホが金融機関の端末として、利用されるようになってきています。また、アマゾンなどの大企業が発行するクーポンなど、銀行券に代わるツールが多様になってきています。まだまだ研究不足ですが、金融インフラの発展から新しい動きが始まりそうです。

G)第VII形態(貨幣形態をつくらない=労働に応じた分配)

Y 量の財 B	=	}	X 量の労働 A
Z 量の財 C	=		
W 量の財 D	=		
.....	=		
	=		

X 量の財 A	=	}	Y 量の労働 B
Z 量の財 C	=		
W 量の財 D	=		
.....	=		
	=		

X 量の財 A	=	}	Z 量の労働 C
Y 量の財 B	=		
W 量の財 D	=		
.....	=		
	=		

第IV形態を転倒させて第VI形態を描きましたが、これはまだ商品の関係でした。さらに、それを社会化された労働の関係として、第VII形態をたててみましょう。

社会化された労働とは、共同体のメンバーになることで実現できます。そうすると、この形態は、マルクスが、コミュニズムの低い段階の分配様式として述べた、「労働に応じた分配」を表示していることが分かります。等価形態の位置にある、各種の労働提供者たちは、社会の総生産物から社会の維持に必要な諸経費(6項目)を差し引いた後の残りを、各人が社会に提供した労働に応じて、受け取ることができるのです。つまり、この第VII形態は、市場社会主義が、市場をのりこえる構想を描き出す際の素材としての意義、をもって

いるのではないのでしょうか。かつての計画経済に代わる、次のシステムへの移行の構想を、ここに読み取ることができます。ここでは、一般的等価物は、ある特定の一商品ではなくて、すべての種類の労働提供が、そのポジションを得るということですが、それは、社会的労働の成立の特質であり、社会の構成員が、それぞれ主体として財を分かち合える関係の始まりを意味します。

しかも、この第Ⅶ形態は、資本主義社会の胎内で産み出される第Ⅵ形態から、金融インフラの変革によって生成してくるだろうし、また、中国のように、国家が共産党の支配のもとにある社会では、この変革を容易にできるでしょう。

いずれにしても、第Ⅳ形態を転倒した第Ⅵ形態の形と、さらにそれを進化させた第Ⅶ形態まで含めたこの社会的象形文字の図一枚で、貨幣の生成と、貨幣生成のない社会の富の仕組みが表現できます。伝統的な左翼の革命論である、権力奪取の発想からは、現実に存在している、市場社会主義からコミュニズムへの移行を構想できません。マルクスの時代には、市場社会主義は存在しておらず、またその構想もなかったのですが、しかし、『資本論』初版本文価値形態論には、その処方箋が描かれていたこととなります。いまこそ、この処方箋を具体化していく時ではないのでしょうか。

(注) 中国社会の下部構造は資本主義であり、だから中国を官僚が独裁する国家資本主義だとみる見方が一般的です。中国を国家資本主義とみるか市場社会主義とみるかはひとつの論点ですが、私は市場社会主義のモデルを、国家資本主義が存在していなかった旧ユーゴにではなくて、ロシア革命の戦時共産主義を終わらせたネップにすれば新しい見方が生まれると考えています。レーニンがネップの時代に食料税を導入して市場を復活させ、その上に国家資本主義の育成をおこないました。ネップが続けば共産党が支配する国家資本主義を含んだ市場社会主義が成長したでしょう。これは今の中国の状況に近似しています。